

「民主主義の限界に翻弄される人類—ロシア—ウクライナ戦争やトルコ・シリア大地震を通して」

関西大学

2023年5月1日

(社)神戸国際支縁機構

理事長 岩村義雄

主題聖句:「五十年目の年を聖別し、その地のすべての住民に解放を宣言しなさい。それはあなたがたのためのヨベルの年である。あなたがたはそれぞれ自分の所有の地に帰ることができる。おのおのその氏族のもとに帰ることができる」(レビ記 25:10 『聖書協会共同訳』)。

<序>

今朝、日本、否、アジア、グローバルな世界の将来を担うみなさんにお目にかかれてうれしく思います。セーレン・キェルケゴール[1813-1855]が言う「世代」、つまり30年後には、話し手である私は、みなさんと再会し、対話の関係性をもつことは不可能でしょう。ですから、ワン・ジェネレーションを経た時、今からお話しする人類の傷口が癒されているかどうか、逆に致命傷になって人間のほとんどが絶滅しているかどうか、私は目撃できません。一方、みなさんはご自身の知性、感性、魂に基づいて30年後に、地球のどこで何をしておられるでしょうか。戦場で敵をやっつけるために限界に追い込まれておられますか。それとも資源が枯渇し、再生可能エネルギーを開発する研究者になっておられるでしょうか。それともスポーツに身を挺してメンタルトレーニングのタイパに喜びを見出しておられるでしょうか。はっきりしていることがあります。一瞬たりとも今日の話など思い出されることはないでしょう。地べたを這ってボランテア道に生涯を捧げた「つまずかせの岩」村の視座について、あいつはホラ吹き野郎、オウム真理教の麻原彰晃[1955-2018]のコピー、無能な活動家だったと回想なさることもないでしょう。私は超能力をもちあわせていないとしても、瞬間的に預言者になれたとして誇ることができます。

今朝は、昨年2月24日にウクライナへのロシア軍侵攻後、戦争の生々しい地に4回足を運び、トポス(現場)で思わせられた衝撃や、先週、イスラーム教のモスクで宗教者として対話をした者として、現実から飛躍した体験をみなさんと分かち合いたいと神戸からやってきました。

はじめに、私は小さなキリスト教会の牧師であります。生活費は手ずから稼ぐために、ギリシャ語、ヘブライ語の語学教師として家族に必要なものを備えて来ました。貧しいからこそ、日本の被災地のみならず、国境を越えて孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者、難民に寄りそっています。なぜなら感情移入できるからです。センサーが共振するのです。東日本大震災、いわゆる3.11の大津波、大地震の時、現地に駆けつけて以来141回、幼稚園園児たちと10回にわたり機械を用いず、「復幸米」づくりを楽しんでいます。しかし、長くボランテアをやっていて、ご一緒にいかがですか、とお誘いする時、みなさん異口同音に反応なさいます。「ボランテアは一度は行ってみたいですが」、ところが、「時間にゆとりができたなら」、「お金にゆとりができたなら」とおっしゃる方で被災地に足を運んだ方には一度もお出合いしたことがありません。海外ボランテアに参加なさる方も、ご自身が貧乏、失業、家族の不幸など試練で打ちひしがれた思い、ペしゃんこになった悲しみ、

<sup>1</sup> タイムパフォーマンスの略。「時間対効果」を意味する。「コストパフォーマンス」の「コスト」を「タイム」に置き換えた造語。

大事なものを喪失したやりきれなさなどを通してきたからこそ、そのような人々のところへ足を運ばれるのです。現体制で満足なさっている地位のある方、たとえば、政・官・財・学の方が自分のお金で辺境地に参加なさる例はありません。もちろん文科省の研究助成費などがあればこそ被災地へ赴いたり、本を書いたり、テレビに出演している方がいることは承知しています。

古今東西、「戦争」、「紛争」、「宗教対立」を回避するために掃いて捨てるほどたくさんの発題、和解論、理論が百花繚乱の如く、打ち上げられてきました。しかし、殺し合いは止んでいません。では、私たちに何ができますか。何もできっこないとつぶやく前に、時代に抗う異端児の言い分に耳を貸してください。

## 目次

(1) 世界大戦はすでにはじまっている	
a. 文明の衝突	3
b. 人の呻きに共振する	4
c. 破局の序章か—ロシア—ウクライナ戦争	5
(2) 戦争に大義はない	
a. ディープフェイクに惑わされる	6
b. 見捨てられたシリア	7
c. 報道されない最大の激戦地	8
(3) 民主主義の限界	
a. 小競り合いか、それとも戦争か	9
b. 領土問題に固執する戦争論	10
c. 民主主義に代わる価値観	12

“無関心な人々を恐れよ—かれらは殺しも裏切りもしない。

だがかれらの沈黙の同意があればこそ、

地上には裏切りと殺戮が存在するのだ”

ブルーノ・ヤセンスキー[1901-1939?] ポーランド出身の詩人、作家。シベリア強制労働に流刑される 1937 年に発行。

『無関心な人々の共謀』(江川卓・工藤幸雄訳 河出書房新社 1974 年 扉ページ)。

## (1) 世界大戦はすでにはじまっている

### a. 文明の衝突

今年2月6日に発生したトルコ・シリア地震により、神戸の私にけたたましい携帯音が鳴りました。シリア国アレッポの「カヨコ・チルドレン・ホーム」の責任者から連絡です。西側陣営に属する日本では、シリアの情報は不確実です。人類の叡知で作りに上げられた文明は21世紀に入るやいなや炎上しました。2001年9月11日、世界のエクスターシア(権威)に亀裂が入りました。いわゆる「9・11」です。私にとり人生の転換点となりました。信頼をおいていたキリスト教的民主主義の未来に暗い影を投げかけるものでした。宗教が人類愛の窮極の経路であったことに懐疑の思いが萌芽しました。災害に見舞われた日本の限界集落、中東のパレスチナ、アフリカの砂漠、ジャングル、不毛の地でただただ歩き出しました。何の収穫もありません。だれひとり救えていません。世の中、ぜんぜん変わっていません。しかし、今日も、歩く合間に、みなさんに見たこと、聞いたこと、味わったことをお分かちします。

9・11 テロの数年前に、世界の政治、宗教、思想に影響を与えた本が日本の書店の店頭でも平積みされました。サミュエル・ハンティントン[1927-2008]<sup>2</sup>著の『文明の衝突』です。中身は「どうしても文明間の衝突は避けられない」という警告の書です。「文明の衝突の危険は、キリスト教とイスラーム教の間に存在している」と近未来に起こりうる対立の構図です。ハンティントンは、福祉国家を目指す考え方に水をさしました。「民主主義は権威によって統制されるべきであり、さまざまな住民集団が政治活動に行き過ぎた参加をしたり、国家に対して行き過ぎた要求を行ったりすることは阻止するべきだ」と1976年に主張していました<sup>3</sup>。

イマヌエル・カント<sup>4</sup>[1724-1804]は、権力分立の方向へと国際法の条約を提言します。「国際法は、自由な諸国家の連合制度に基礎を置くべきである」と国際的な機関、つまり国際連盟、国際連合の国際法によって一つの世界共和国を発題します<sup>5</sup>。ウッドロウ・ウィルソン[1856-1924]<sup>6</sup>の青写真である「世界が民主的であれば、そしてそうである場合にのみ、平和が可能である」、と民主的な国々の間で軍事紛争は比較的まれであるという政治的レトリックをブッシュ親子<sup>7</sup>、ビル・クリントン[1946-]なども継承します。近年のネオコン<sup>8</sup>の人々は、民主的な国々の間で軍事紛争は比較的まれであると喧伝してきました。やがて西側諸国や、日本においても民主国家どうしが戦争をすることは決してない、「民主国家どうしが武力を用いることは決してない」という極論がまかりとおるようになります。しかし、歴史を振り返ると、非常事態である戦争に人類は明け暮れてきています。平和研究者がよく援用するストックホルム平和研究所の「ウプサラ prio」<sup>9</sup>に基づく民主化による戦争減少傾向仮説はロシアーウクライナ戦争が勃発することによって、吹っ飛びました。

<sup>2</sup> アメリカ合衆国の国際政治学者、ハーバード大学教授で、『文明の衝突』(1996年)の著者。日本語版は1998年。拙論「キリストはキリスト教だけのものではない」(2018年 エラスムス平和研究所 14頁)。

<sup>3</sup> “The crisis of democracy”『民主主義の統治能力：その危機の検討』(サミュエル・P.ハンチントン、ミッシェル・クロジエ、綿貫譲治訳 日米欧委員会編 サイマル出版会 1976年)。

<sup>4</sup> 拙論「キリスト教と非戦」(OCC カレッジ講義 エラスムス平和研究所所長 2015年 10-11頁)。

<sup>5</sup> 拙論「キリスト教と非戦」(同 10-11頁)。民主的な共和制に移行しても、国民の熱狂、暴走によって権力が戦争に突入することも生じるからです、とカントの「民主平和論」を否定。

<sup>6</sup> ウィルソンは1917年参戦演説で、「平和のための強固な協調関係は、民主的な国々の協力関係なしには決して維持できない」と民主的な国民国家は当時10数ヶ国しかないにもかかわらず、理想主義の実現を目指した。

<sup>7</sup> 拙論「あなたはいつ抑圧された人に寄り添うのをあきらめたのか」(神戸新聞会館 2021年 1,2,11頁)。

<sup>8</sup> ネオコン(1981年以降、米国における新保守主義 ネオコンサバティズム Neoconservatism の略)に犯されている日本、東南アジア、香港のクリスチャンが多いことは憂慮すべき現象です。拙論「あなたはいつ抑圧された人に寄り添うのをあきらめたのか」(同)。

<sup>9</sup> 「ウプサラ prio」については、エラスムス平和研究所の巻頭参照。

<http://kicc.sub.jp/%E3%82%A8%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%A0%E3%82%B9%E5%B9%B3%E5%92%8C%E7%A0%94%E7%A9%B6>

政治学では、民主主義とは競争的な選挙を行う政治体制です。野党の参入の有無を認めることも必須です。冷戦時代は、民主主義はソ連を批判するのに有利でした。しかし、実際には、独裁体制の8割が選挙し、野党の参加を承認しています。たとえば、北朝鮮、つまり1948年9月9日に独立した朝鮮民主主義人民共和国(以後、共和国)の憲法の条文には、民主主義的な共和国と謳っています。朝鮮労働党以外に、二つの野党があります。朝鮮社会民主党と天道教青友党です。哲学者マルティン・ハイデッガー[1889-1976]は、民主主義が現代のテクノロジー社会に適切かどうか疑問を表明しています。ハイデッガーの弟子であるハンナ・アーレント[1906-1975]は反ブルジョワ的なスタイルを支持していました。ブルジョワとは「利益集団」の政治、貪欲な競争社会の現れだからとアーレントは受け入れることができなかつたのです。アーレントは、『エルサレムのアイヒマン』を書いた際、アイヒマンを徹底的に糾弾するのではなく、凡庸な悪は実は、ユダヤ人側にもあることを浮き彫りにしました。その結果、今度は彼女自身が同胞のユダヤ人たちから背を向けられてしまいます。大衆がもっている無関心が悪だと彼女は論及しました。

日本でも統一地方選がありました。無投票で当選、東京の中央区長選はそれぞれ、告示日に無投票で当選者が決まりました。このうち21市町村議選は、候補者が定数に届かない定数割れでした<sup>10</sup>。民主国家として日本は胸を張れるのでしょうか。

民主国家同士は戦争をすることがないとみなさんはお考えでしょうか。

## b. 人の呻きに共振する

2023年2月6日、第35次球磨川(熊本豪雨)ボランティアにおいて福岡県朝倉市杷木松末<sup>はきますえ</sup>で傾聴ボランティアのため戸別訪問をしている時です。樋口実&喜寿江夫妻と話していました。午前10時17分、携帯の着信音が異様に鳴り続けました。「カヨコ・チルドレン・ホーム」のシリア国の第二の都市アレッポ<sup>アースクエイク</sup>責任者バヘード夫妻から「Earthquake!」という叫びでした<sup>11</sup>。身体に怪我などないことを確認し、現地情報を聞きました。イスラエル空軍の総攻撃かと思うほど激しい揺れがあり、建物のほとんどは倒壊しているとの知らせでした。神戸国際支縁機構の5年前のシリア・ボランティア、2年前のトルコ国イズミル地震ボランティアを記事にしている日本のメディア関係者からもすぐに問い合わせが入りました。8日の朝刊には記事掲載<sup>12</sup>にとりあげられました。

連絡を密にとり、メッセージで画像を通して現地の被災状況などの情報を集め、全国に救援金依頼を発信しました。シリア軍も何から手を付けて良いか途方にくれるほど、下敷きになっている人々のがれき処理に追われています。アレッポのネルさんからトルコには世界各国から救援物資が届いているが、シリアには一機の救援飛行機も飛来しないと怒り、苦しみ、くやしさの声でした。

シリアに世界はどうして冷たいのでしょうか。

米国トランプ前大統領の時、シリアからアメリカ軍を完全撤退すると公言しながら、米軍は現地に今なお駐留しています。2011年の内紛以来、西側諸国から完全に危機ゆえに隔離されてしまっている状態です。シリアからの国外への難民は650万人以上です。人道上人類史上最大の悲劇と言えるでしょう<sup>13</sup>。

<sup>10</sup> 『朝日新聞』(2023年4月24日付)。

<sup>11</sup> トルコ・シリア地震 2023年2月6日午前4時17分(日本時間10時17分)。マグニチュード7.8。震源地はトルコ国南東部 Gaziantep ガジアンテップ。「カヨコ基金」は2020年11月27日の地震直後、被災地トルコ国イズミルを訪問。現地『ソズキュ放送』Sözcü TVなどで取材される。  
<http://kisokobe.sub.jp/%e6%b5%b7%e5%a4%96%e3%83%9c%e3%83%a9%e3%83%b3%e3%83%86%e3%82%a3%e3%82%a2/1734>

<sup>12</sup> 『神戸新聞』(2023年2月8日)、『中外日報』(同)、『クリスチャントゥデイ』(同2月10日)、『クリスチャン新聞』(同2月27日付)等。

<sup>13</sup> 拙論「人道上人類史上最大の悲劇—第2次シリア・ボランティア報告—」(エラスムス平和研究所 2018年7頁)。

9・11 テロ以降、アメリカは当初、攻撃は軍事目標に限定していると発表していました。誤爆などで住宅や民間施設も被害にあいました。その結果、多くの人命が失われました。戦争から逃れるために多くの難民が発生することになりました。「テロ」(英語で KAMIKAZE「カミカゼ」は自爆攻撃)<sup>14</sup>誕生の原因となったことはいうまでもありません。私たち神戸国際支縁機構が発足する契機となりました<sup>15</sup>。2001年10月に米英両軍がアフガン空爆を始めた直後、米紙ワシントン・ポストの世論調査によると米国民の94パーセントが軍事行動を支持しました。1812年の米英戦争以来となる米本土への直接攻撃に米世論は憤激し、ジョージ・ブッシュ大統領<sup>16</sup>への支持率も空前の高水準を記録<sup>17</sup>。当時のブッシュ政権は駐留継続を選びます。ブッシュは在任当時、演説でこう語っていました。「この地に民主国家を作り上げる」という遠大な構想でした<sup>18</sup>。ブッシュの世界観は、「我々は中東で民主主義を尊重し、中東でこれ以上憎悪やテロがはびこらないようにし、それによってこの戦争の勝利を追求する」、と世界中に訴えました。武力による民主主義はキリスト教、とりわけ永遠のベストセラーと言われる聖書と相容れるのでしょうか。世界のキリスト教会の多く、総じて福音派は、アメリカの指導者による現代の「十字軍」を容認していました。

2001年ニューヨークの貿易センタービルの炎上から約20年、神戸国際支縁機構によるアフガニスタンへの支縁は少しも実ってきませんでした。アフガニスタン政府の転覆、自爆テロ、タリバンが躍進します。現地では、泥沼化、米兵2461人の犠牲、2兆3千億ドル(253兆円)もの損失の20年を経て、「米史上最長の戦争」の幕引きとなりました<sup>19</sup>。

### c. 破局の序章か—ロシア—ウクライナ戦争

ブチャ、イルピン、ゴロディアンカ、マカリウより ホストーメリ空港

神戸国際支縁機構はロシア—ウクライナ戦争勃発のおよそ2ヵ月後に、戦争停止についての共同コミュニケ<sup>20</sup>を世界に向けて発信させていただきました。いかんせんグローバルサウス<sup>21</sup>でない日本では見向きもされませんでした。話題にもなりません。1989年、ペレストロイカによって、冷戦終結を世界は喜びました。神戸国際支縁機構は、2016年にベトナムに学生たちと訪問。ベトナム戦争(1955年11月1日-1975年4月30日)時に、米軍の枯れ葉作戦の後遺症で苦しむハンディキャップの子どもたちを各地で見ました。しかし、米国は負けたにもかかわらずベトナムに賠償をしていません。2001年、神戸国際支縁機構が立ち上がったのは、米国のアフガニスタンへの空爆、地雷敷設、アル・カイダ掃討作戦の戦禍で、人が住めない地となったからです。2020年、中村

<sup>14</sup> 海外メディアは、自爆テロを「a kamikaze or a suicide bombing」(=カミカゼ、すなわち、[相手も自分も爆死する]爆弾自殺任務と呼ぶ。私たち日本人の戦争の負の遺産が受け継がれている。『[新]キリスト教入門(2)』(新免 貢 燦葉出版社 2020年 69頁)。

<sup>15</sup> 拙稿『祈りの波—パレスチナの悲劇に無関心であってよいのか—』(2021年、5月28日付、2頁)。米国はアフガニスタンのタリバンに攻撃をした。孤児たちには何の罪もない。どうしてキリスト教国と言われる国が残虐さを剥き出しにしたのか。「キリスト教」の旗の下で、「和解」への道どころか、テロの温床を創造する破壊、抑圧、偏見の現実がつけつけられた。神戸国際支縁機構は何かできることがないだろうかという感性に基づいて、情報収集、セミナー、支援(2001年以降「支縁」)活動を始めていくことになった。戦争、震災などで傷ついた人々と共生、共苦、苦縁のために小さな働きを始めた。

<sup>16</sup> ジョージ・ウォーカー・ブッシュ[1946-] 米国第43代大統領。大統領在任:(2001年1月20日-2009年1月20日)。2001年10月7日、米国ニューヨーク市の同時多発テロの報復として、「対テロ戦争」という名目でアフガニスタンに空爆を開始。米国は当初、攻撃は軍事目標に限定していると発表していたが、誤爆などで住宅や民間施設も被害にあった。

<sup>17</sup> 同時多発テロ事件後、歴代のアメリカ合衆国大統領の中で最高値である91パーセントにまで達した。“USAT/Gallup Poll : Bush approval at new low ; Republican support eroding” USA Today. (2007年7月10日)。

<sup>18</sup> 『決断のとき 上』(ジョージ・W・ブッシュ 伏見威蕃訳 日本経済新聞社 2011年 294頁)。

<sup>19</sup> バイデン米大統領は2021年8月31日演説。「米国は昨夜(30日夜)、米史上最も長い20年に及ぶアフガン戦争を終わらせた」。『ワシントン時事』。

<sup>20</sup> 季刊誌『支縁』No.39(2022 1頁)「ロシア悪玉論では出口はない」、日本など3ヵ国による仲裁を提案。

<sup>21</sup> 「グローバルサウス」(南半球を中心とする新興・途上国) 構成は、インド、インドネシア、トルコ、南アフリカなど。北半球の先進国に對比する途上国。

哲[1946-201]<sup>22</sup>の犠牲がありました。2021年、アメリカは撤退し、タリバン政権ができました。大量破壊兵器があるというウソの理由で米国はイラクに攻撃して、イラク共和国の大統領サダム・フセイン[1937-2006]を殺害しました。2003年3月20日<sup>23</sup>の「十字軍＝シオニスト連合」は、欧州への移民出身者がパラサイト的と疎んじる憎悪を増幅させました。それはイスラーム主義隆盛を生育させる肥料となりました。イラク、アフガニスタンは、現在も治安は回復していません。そのことによって、軍需超大国の米国はグローバルサウスから信頼を失墜しています。ロシアのプーチン批判、香港、台湾の有事についても、世界は米国の強硬政策を見限っています。

一方、冷戦構造の雄ロシア(ソ連)も、1989年、アフガニスタンから撤退せざるを得ませんでした。米国から大量の武器支援されたタリバンには勝てませんでした。1994年からのチェチェン戦争は泥沼化し、ロシアは手痛い目にあいました。

## (2) 戦争に大義はない

### a. ディープフェイクに惑わされる

戦争に大義はありません。チェチェン軍はウクライナを今回砲撃しています。

新聞などのメディア、専門家、学者たちの見解をつぶさに検証していれば、真実は迷宮入りになるから摩可不思議です。ともすると現地で直接、見て聞いた証言を封殺されるからです。古今東西を問わず、やっかいなステレオタイプの症状と言えます。気づいた時は、もう引き戻せない戦禍の底なし沼で、のたうち回っています。たとえば、シリアの地震被害についても、トルコ側のみに救援物資が届けられています。偏見が西側諸国にあります。シリアだけ除外している非寛容さを看過できません。日本はグローバルノースの一員にしてアメリカ合衆国の属国のように随伴しています<sup>24</sup>。SNSのプロパガンダ、共同通信の拡散である画一化した情報戦、専門家のディープフェイク<sup>25</sup>の洪水によって、正確な実態についての判断ができなくなっていますか。TV番組は何を報道しているのでしょうか。私たちが、アメリカ・英国・イスラエルは正しく、パレスチナ・シリア・イランは悪であるという二元論を刷り込まれているとするなら本質を見失います。「民主主義」対「全体主義」の戦いの構図はわかりやすい説明かもしれませんが、嘘にまみれています。イラクのサダム・フセイン[1937-2006]、リビアのカダフィ[1942-2011]、アフガニスタンのウサーマ・ビン・ラーディン[1957-2011]を殺害しても「アラブの春」は足が遠のいただけを思い起こしていただきたいです。日本を含めた西側のマスコミでは二元論でロシアは「悪」、ウクライナは「善」という固定観念の繰り返しです。

<sup>22</sup> 拙論「あなたはいつ抑圧された人に寄り添うのをあきらめたのか」(神戸新聞会館 聖書のことばシリーズ 第86回 2021年4-11頁)。

<sup>23</sup> 拙論「あなたはいつ抑圧された人に寄り添うのをあきらめたのか」(同 2021年9頁)。

<sup>24</sup> 拙論『人道人類歴史最大の悲劇』—第2次シリア・ボランティア報告(エラスムス平和研究所 2018年2月17日 5-7頁)。「シリアはアラブの春に逆行し、アサド政権がサリンなど化学兵器を用いているという米国の宣伝によって、アサドが自国民をジェノサイド[集団殺害]しているかのように、日本の多くの識者は受けて止めています。欧米メディアでは、アサド政権が「悪魔の独裁政権」「残虐な殺人政権」のような一方的な報道をしています。しかし、私たちが出会ったシリア人はアサド政権を支持している人たちが多かったことは事実です。反政府勢力の方がむしろ孤立している印象をもちました。(本文「アサド政権が諸悪の元凶なのか」から抜粋。出典：9)『テレビ・新聞が決して報道しないシリアの真実』(国枝昌樹 朝日文庫 2016年14-15頁)。10)『職場観光～シリアで最も有名な日本人』(藤本敏文 幻冬舎 2015年276頁)。11)『レバノンから見たアラブの苦悩 アメリカの不正義』(同 113頁)。12)『日本経済新聞』(2018年2月10日付)。13)『イスラムを知らない世界が見えない』(佐々木良昭 曜曜社出版 1987年 67頁)。14)『レバノンから見たアラブの苦悩 アメリカの不正義』(同 108頁)。15) (同 116頁)。16)『中東特派員はシリアで何を見たか』(津村一史 dZERO 2015年 85-86頁)。17)『政府は必ず嘘をつく』(堤未果 角川マガジズ 2012年 19頁)。

<sup>25</sup> deepfake 人工知能(AI)で作成された偽動画。

見逃してはならない動きがあります。20 世紀後半から 21 世紀前半にかけての新たな政治・宗教の合体です。超大国に共通しているのは政教分離ではありません。むしろ政教一体化です。西側の雄である米国も宗教と政治が強固に結びついてきました。ニクソン[1913-1994], レーガン[1911-2004]の大統領の就任式には祈禱を担当したビリー・グラハム[1918-2018]<sup>26</sup>がいます。グラハムは米国, 韓国, アジア各国の福音派の教皇的存在です。ベトナム戦争, 湾岸戦争, アフガニスタン, イラン, イラク戦争への介入に影響力をもちました。一貫した反共の立場です。ロシアの正教会のキリル・モスクワ総主教も善悪闘争において, 西側の LGBTQ に対して容赦しない思想について一貫しています。

ロシア語も話すウクライナのジトームイルのヴィクトールさん(65 歳)は, 語りました。「自らをロシア人とみなすかウクライナ人とみなすか, が決定的ではない。どちらの国籍かではなく, どちらを支持するかは, 時, 場所, 選択に依存している」と。彼の言葉からも, 同じ民族, 同じ正教会なのに, 血を流すのは馬鹿げているという発言は考えさせられます。ましてや, よその国が, 「人権」, 「正義」, 「民主主義」という世界観を押しつけるのは, 戦局を一層複雑にするだけだと, 気づかされました。

前述の「グローバルサウス」という聞き慣れない言葉がメディアによく登場するようになっていきます。一方の「グローバルノース」は世界のワクチンの 75 パーセントを占有している格差があります。

日本にいるとわからないことですが, 世界はロシア批判で一枚岩となっていません。グローバルサウスはウクライナからも距離を置いています。先進国, とりわけ英米が振りかざす「正義」や, 自国優先の二重構造に冷ややかなのです。中東においては, 英米・イスラエルの強権をやめさせる力が国連をはじめどこにもないことが人類にとって不幸と言えます。

## b.見捨てられたシリア

2 月 6 日の大地震後, トルコ支援は日本からも活発ですが, シリアは取り残されています<sup>27</sup>。

ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥング[1930- ]<sup>28</sup>は, 加害者がだれか不明な場合の暴力を「間接的暴力」と呼びました。ガルトゥングは, 文化的暴力として, 構造的暴力を合法化する宗教, 芸術, 科学, コスモロジーを挙げています。私たちの中の路上生活者, 統合失調症者, ハンディキャップ, 在日など比較的社会から疎んじられているメンバーが働きの核になっています<sup>29</sup>。国, 県, ボランティア・センター(VC 通称「ボラセン」)からも一切, 助成, 交通費支援などもなく, 自転車操業です。そのおかげかどうかは分かりませんが, 痛みつけられているシリア, パレスチナの人々の痛み, 苦しみ, 怒り, くやしきには私たちは敏感に共振しやすい位置にいます。さらに応援してくださる方々の多くも決して裕福とは言えません。

<sup>26</sup> ビリー・グラハム[1918-2018] アメリカのキリスト教(南部バプテスト連盟)牧師。アイゼンハワー大統領の対共産圏強硬政策と合致。米国の戦争を神の意志による正しい戦争と, ベトナム戦争を支持。歴代のアメリカ大統領の就任式では祈りを捧げ, ホワイトハウスのチャペルとして精神的な支えとなった。『アメリカ・キリスト教入門』(大宮有博 キリスト新聞社 2022 年 220,238 頁)。

<sup>27</sup> “「なぜシリアには冷たいの？」被災現地から聞こえる声” 「カヨ子基金」(2023 年 2 月 6 日)。  
<https://www.christiantoday.co.jp/articles/31981/20230210/why-is-the-world-so-cold-to-syria.htm>。

“シリア「世界が見捨てた」被災地市民, 家族救出祈る”『共同通信』(2023 年 2 月 10 日付)。

<sup>28</sup> 『構造的暴力と平和』(ヨハン・ガルトゥング 高柳先男他訳 中央大学出版部 1991 年 44 頁)。拙論「キリスト教と非戦」(OCC カレッジ講義 2015 年 22 頁)。拙論「なぜ憲法 9 条は大切か」(憲法 9 条をノーベル平和賞に推す神戸の会 兵庫県民会館 2022 年 22 頁)。利己主義では, 他人を犠牲にすることで, 自分自身の利益を最大限にしようとする個人が前提とされている。一方, 利他主義は, 自分自身を犠牲にしても, 他人の利益を最大に擁護しようとする個人が前提とされている。

<sup>29</sup> 拙論「ボランティア道の本質」(ミント神戸 2022 年 9 頁)。抑圧, 差別, 偏見をもたれてきた「路上生活者(ホームレス)」, 「統合失調症, 分裂症, うつと言われた方々」や「ハンディキャップの者たち」が中心となって現場に赴く。

パレスチナ問題について、神戸国際キリスト教会の立ち位置である「解放の神学」を詳説することは度々あります<sup>30</sup>。「パレスチナ、中東のテロについて、神は侮られる方ではありません。政治家、戦禍をもたらした指導者は、コロナ禍にあっても、教育・医療・福祉をパレスチナの人々にもたらそうとしない。70年以上になる。そんな連中の祈祷師になってしまった薄情<sup>31</sup>な宗教家こそメタノイア<sup>32</sup>(悔い改め)すべきだろう(ローマ 1:31)」と。政・官・財・学、メディアだけでなく、宗教家も「無知、不誠実、無情、無慈悲」と大衆の目には映ります。戦禍、地震、津波などで困窮している人々の救いはどこからもたらされるのでしょうか。宗教を遍歴してきた結果、地平線にうつすらと見えてきた光景はおぞましい闇でした。長いトンネルをもはや抜け出られないのかと窒息しかかっています。隣の医療施設からもれる目に見えないコロナウィルスの蔓延。発狂しそうになる無策のつけにのたうち回っている隣人たちとどのように生きていけばいいのでしょうか。

ゴキブリ<sup>33</sup>のように何度も叩き潰されても、私が残り続けてきたのはなぜでしょうか。これぞ神の存在が見えてきた証しです。しぶとく生きてきました。いかに人々から嫌われようがまだ臭い息をしています。米英軍、イスラエル軍やアブバクル・バグダディ[1971-2019]に空爆されようとも「カヨコ・チルドレン・ホーム」を建てる願いは消滅しません。アジア人はともすると有形のものは滅びるのだから、と考えがちです<sup>34</sup>。しかし、寄る辺のない孤児たちには、地雷、空腹、孤立化からの解放を顧みる大人、社会、共同体の責任があるでしょう。なぜなら孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者、難民は、戦争に基づく政治的責任がないからです。基本的人権を享受すべきです。人権のない人々にたいする歴史的介入にキリストは低みに立ちました。「この自由を得させるために、キリストは私たちを解放してくださいました。ですから、しっかりと立って、二度と奴隷の軛につながってはなりません」と福音を携えて出かける大使級のはたらきです(ガラテヤ 5:1)。制度宗教は、痛みつけられた貧者を守ってきたのでしょうか。

### c.報道されない最大の激戦地

西側のメディア報道に取り上げられないロシア対ウクライナの最大の激戦地があります。

東部のドンバス、ドネツク洲、バフムートの情報が世界を席巻しています。アメリカのシンクタンク「戦争研究所」(ISW)が流す戦闘は真実でしょうか。双方の死者数、破壊された戦闘車両などの数、兵士の数などどれも信頼できません。数字が増えたり、減ったりしています。最前線では正確な統計など不可能です。

神戸国際支縁機構は、キーウ(キエフ)洲の首都近郊都市にこれまで4回訪問しました。孤児の家をつくる候補地が3ヶ所ある中で、最初にどこに建てるかを世話してくださるオクスナさんと打ち合わせをしています。2月24日侵攻直前からロシア軍は虎視眈々と狙っていた地点がありました。ロシア軍が支配した場所はキーウでは二ヶ所だけです。ブチャとイルピンです。

去年、戦闘から3ヵ月、ブチャのモシユチュンという地域はウクライナ軍が部外者、ジャーナリスト

<sup>30</sup> 拙稿「パレスチナの悲劇に無関心であってよいのか」(『祈りの波』エラスムス平和研究所 2021年1頁)。

<sup>31</sup> 「薄情な」とはギリシア語 *ἄστοργος* アストルグース(＜*στοργή* ストルゲー「愛情」から派生(自然の情愛を欠く、愛情のない、無情な)の意)です(ローマ 1:31)。

<sup>32</sup> メタノイアの動詞メタノエオー *meta*、「変化」+*no*「考える」＝「視座を変更する」「否定の論理」(Mr 1:15)が本来の意味。(新約に33回)。名詞形のメタノイア(同22回)。『続「小さくされた者の側に立つ神」(本田哲郎 新生社 2000年106-107頁)。

<sup>33</sup> 拙論「キリスト教とボランティエ道—水平の〈運動〉から、垂直の〈活動〉に—」(宗援連 東京大学 2016年29,30頁)。

<sup>34</sup> 「諸行は無常なり」(《大般涅槃經》)小乗の『涅槃經』にある東晋の法顕が訳出。英語 *Nothing is permanent*。(不朽なものはない)に相当する。『岩波仏教辞典』(中村元共 岩波書店 1989年648頁)。



たちが入らないように厳重に見張っていました。写真撮影も禁止です。モシュチュンは 5 月に訪問した際、ブチャから首都へ行く橋を爆破したのはどちら側か、なぜロシア軍は 1 ヶ月以上、ブチャ、イルピンにいるにもかかわらず、キーウに突入しなかったのか、わかりませんでした。ブチャ近郊の村モシュチュンの激しい戦跡で生き残った人と対話して、思いがけない情報を耳にしました。ロシアの狙いは「ホストーメリ空港」(ウクライナ語:アエロポールト・ホストーメリ, 英語: Hostomel Airport)を占領することだったと言うのです。思わず「なぜ」と、聞き直していました。

空港から近いモシュチュン村 Moschun [Moshchun]も首都キーウ市から 32 キロ離れています。空港はかつてソ連時代に大気圏外に宇宙衛星を発射する重要な要塞のひとつでした。2022 年 2 月 24 日、ロシア軍最強のエリート部隊 200 人の「スペツナズ」エリート空挺部隊がヘリコプターから降りてきたところ、待ち構えていたアメリカ軍の傭兵たちが「スペツナズ」を殲滅しました。正規ではない米軍が空港の警備をしていた理由も謎に包まれています。空港支配権は奪われませんでした。2 日後にはロシア軍に攻略されてしまいます。ウクライナ軍は空港を奪還するためにロシア軍との激戦を展開しました。ウクライナが誇る世界最大の航空機 An-225 ムリーヤなどもロシア軍に爆破されました。東部より最激しい戦闘地でしたが、ウクライナは世界の関心を東部戦線に釘付けにしたため、空港の壮絶なバトルはほとんど知られないままで今日に至っています。ウクライナ軍の司令官マゴメド・ツシャエフ(ロシア国境軍第 141 連隊)はウクライナ兵の多くの犠牲を出しながらも、ホストーメリ空港を死守しました。プーチンの戦略として空港を制圧すれば、大量の兵士を送り込めます。直ちに移動してウクライナの首都を陥落し、短期決戦を制してウクライナ国に降伏を迫るという戦略だったのでしょうか。目論見はずれました。空港付近一帯はウクライナの最前衛の急所であり緊迫していました。足を踏み入れてはじめて身体全体に恐怖が襲いました。実態がロシアに筒抜けにならないように、かん口令が敷かれていました。私たちが 2023 年 2 月に訪問したモシュチュン村付近は緊迫していました。ちょうど一年目になるので、再度、空港を攻略するのではという恐怖感が地域の空、森、廃屋を覆っていました。写真撮影をしようとする、無人地帯にもかかわらず、民間人か軍人かわからない監視員が突如現れ、データを消すように威圧的に命じました。破壊損傷した建造物、道路、無人と化した村の撮影は一切禁止でした。ウクライナ兵士の片方だけの靴などもあちらこちらに散乱したままです。ウクライナ兵の犠牲の大きさを物語っています。死傷者に手向けられた 1 輪の花の色の鮮やかさと激戦地の闇は対照的でした。戦死者を懇ろに葬る儀礼もありません。ウクライナでは、2022 年 4 月以降、18 歳から 60 歳までの男性を東部の最前線に集中して送り込む国の方針を想起せざるを得ませんでした。戦場にいるという自覚が高まりました。戦争は秘密裏に進行します。無慈悲です。

### (3) 民主主義の限界

#### a. 小競り合いか、それとも戦争

今、人類を脅かしているのは、異常気象、発展途上国の 8 億 500 万人が飢餓の現実がありつづけます。一方、日本では賞味期限などのため毎日 3000 万食を廃棄、病名さえわからない変種のウイルス感染に戦々恐々としています。軍備を拡張し、やられる前にと「敵基地攻撃能力(反撃能力)」<sup>35</sup>で装備するのだと言われています。憲法 9 条は黙殺されています。「国、破れて山河あり」

<sup>35</sup> Enemy Base Attack Ability 2022 年 9 月 30 日に、読売新聞グループ本社の山口寿一社長が敵基地攻撃能力を保有する必要があると主張。

(杜甫の律詩)から78年経て不戦の誓いも一顧だにしません。日本はロシアやインドを抜き、米国、中国に次ぐ世界3位いつのまにか世界三番目のミリタリーパワーです。民衆は法的自由より、権力に服従することが正義だと信奉しています。監視カメラがいたるところにあり、公共の乗り物などでも安全のために〇〇してください、とリピートのアナウンスに慣れっこです。絶対者は民に対して規制、画一教育、警察力をもって監視します。フランスの哲学者フーコー<sup>36</sup>は民主主義を標榜する近代社会をパノプティコン社会と表現しました。フーコーは英国の功利主義哲学者ジェレミー・ベンサムが考案した監獄「パノプティコン(一望監視施設)」<sup>37</sup>だと、今日の支配社会を表現しました。民は型にはまった生活空間に窒息するどころか、「世は平和や」と嘯きながら、運命に身を任せ諦観しています。過疎、高齢化、少子化、自死の低年齢化にも、無関心です。

民主主義国家の最高潮を演出する米国は白人の国です。少数派の白人が多数派の黒人、増えつつあるヒスパニック系、原住民であるインディアンたちを虐げてきました。

2020年5月25日月曜日。ミネソタ州ミネアポリスで黒人男性ジョージ・フロイドが白人警官に取り押さえられ、現場で意識をうしななって亡くなりました。暴力が密室<sup>38</sup>で行われるのは戦時下の特徴です。戦争では、拷問は日常茶飯事な蛮行です。イラクのアブグレイブ刑務所<sup>39</sup>(イラク戦争の捕虜を米軍が虐待)や、キューバのグアンタナモ米軍刑務所<sup>40</sup>(アフガニスタン戦争の捕虜を裁判も受けさせずに長期収容)の例も見過ごすことはできません。

民主国家といえどもこれまで戦争をしてきた事実を理論を前提に紹介すると、まったく違った結論に導かれます。その典型は米国の政治学者ブルース・ラセット[1935-]の指摘から明らかです<sup>41</sup>。彼は民主国家間の戦争のリストをあげています。

米英戦争(1812年)、ローマ共和国対フランス(1849年)、アメリカ南北戦争(1861年)、エクアドル対コロンビア(1863年)、普仏戦争<sup>ふふつ</sup> プロイセン対フランス(1870年)、米西戦争<sup>べいせい</sup> アメリカ対スペイン(1898年)、ボーア戦争 イギリスとオランダ系アフリカーナー(1899年)、第二次フィリピン戦争(1899年)、第一次世界大戦 帝政ドイツ対欧米民主共和国(1914-1917年)、第二次世界大戦 フィンランド対欧米民主共和国(1941年)、レバノン対イスラエル(1948年)、レバノン対イスラエル(1967年)の12ヵ国だけです。

1975年、アイスランドとイギリスの間で漁獲権がこじれました。「タラ戦争」が起きました。1982年には、イギリスとアルゼンチンの紛争が勃発し、戦死者は950人に上りました。しかし、ラセットの分析は常に民主主義は「善」という視座が先行しています。そのせいか、歯切れが悪いのです。死者まで出た戦争もあたかもハッピーエンドで終わります。流血などどうでもいいのでしょうか。戦いの爪痕を無視できない現実がありましたから、米西戦争は例外扱いです。分析が我田引水と言わざるを得ないのはアイスランドとイギリスの交戦について言及していないことです。

戦争により政治的責任を負う必要がない孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者、難民ま

<sup>36</sup> ミシェル・フーコー[1926-1984]が1974年に論及。『監獄の誕生 - 監視と処罰』(ミシェル・フーコー 田村俣訳 新潮社 1977年 202-204頁)。

<sup>37</sup> パノプティコン(ギリシャ語 πᾶν 「すべての」 pan+ὄπτικ 「見る」 optik)とは、英国の功利主義哲学者ジェレミー・ベンサム[1748-1832]が刑務所の改善案を思案して考えついた集中型の監獄(刑務所)の形式。一望監視施設(装置)。

<sup>38</sup> 小林多喜二[1903-1933] 蟹工船などの作家。殺すつもりで拷問。無残な遺体写真。拙論「キリスト教と非戦」(同 15頁)。

<sup>39</sup> 『テロと殉教—「文明の衝突」をこえて—』(ジル・ケペル 丸岡高弘訳 産業図書株式会社 2010年 30-33頁)。

<sup>40</sup> 『テロと殉教—「文明の衝突」をこえて—』(同 19-29頁)。

<sup>41</sup> “Grasping the Democratic Peace” Principles for Post-Cold War World, Bruce M. Russett, Princeton University Press, New Jersey, p.17. 『パクス・デモクラティア- 冷戦後世界への原理』(ブルース・ラセット 鴨武彦訳 東京大学出版会 1996年 26頁)。

でも被害に遭遇するのです。民主主義が戦争を回避できるという専横な理論こそ危険です。

ウクライナ、シリアにおける見境なしの殺りくに明け暮れる事態は、「戦争」というカテゴリーで考えるべきでしょうか。現場に行くと、親を失い、一家の大黒柱を殺され、地雷でハンディキャップになった底点を目の当たりにします。戦争被害ではなく、「暴力」、「暴虐」、「倒錯行為」による犠牲に映ります。軍事力では解決できません。前述した通り、アメリカはイラクから、またソ連はアフガニスタンが撤退した理由は何でしたか。混迷を極めた阿鼻叫喚に收拾が付かなくなったからです。

## b. 領土問題に固執してきた戦争論

外国の軍隊の侵入は自国を占領下におくので、家庭に泥棒が押し入るのをただ傍観しておくことができないのではと、良心者<sup>42</sup>は問うでしょう。クラウゼヴィッツ支持論者でなくとも、戦争は必要悪と主張する空気が日本列島を覆っています。世界で一番古い非戦論を体系的に述べたのは中国の墨子[紀元前 450-390 頃?]です。墨子は上・中・下に分けて『非攻』篇を書いています。「非攻」とは侵略戦争に対して否定、防止をする行為です。墨子は自ら「賤民」の出であることを広言し、各地を転々と仕事を求めながら移動する工人の群れの指導者でした。「一人を殺さば、これを不義と謂い、必ず一死罪あり。…いま大いに不義をなし国を攻むるに至りては、すなわち非とするを知らず、従いてこれを誉めてこれを義と謂う」<sup>43</sup>。18世紀まで、墨子の思想は黙殺されていました。

オランダ商館などで学んだ青森県八戸の医者安藤昌益[1703-1762]は墨子と著しく共通した平和観をもっていたにもかかわらず、記していません。儒教の精神、先生、親、君主に対する礼節を重んじる孟子たちの教えが主流になります。昌益の耳に墨子の非戦論は届かなかったようです。昌益は中国王朝の興亡史だけでなく、「記紀」(古事記、日本書紀の総称)を研究し、『自然真栄道』を著します。書の中で、「治」(=構造的・間接的暴力)と「乱」(=人的・直接的暴力)による他国への侵略、略奪、盗乱について戒めています。「金銀の通用を爲すが故に、賣買利慾の法盛んにして、天下の利慾大いに募り、漢土(中国)より天竺(インド)、阿蘭陀、日本を奪はんとし、日本より朝鮮を犯し、臺灣を取る。金銀通用賣買の法を立て、自由足り、侈りを爲し易し。侈りは亂の根なり」<sup>44</sup>、と「乱の根」を分析しています。諸外国への侵略戦争について軍事、経済両面の野望から発生するとクリティックしているのです。戦争の対極である「平和状態」の思想家が日本の江戸時代にいたことは特筆すべきでしょう。昌益は、神功皇后の三韓征伐、豊臣秀吉の朝鮮半島侵犯、薩摩藩の琉球支配、松前藩のアイヌモシリ[人間の静かなる大地]侵略などを否定しています。『孫子』冒頭にある「兵は国の大事」を昌益は批判し、「兵は国の乱具なり」と述べられています。「兵は凶器なり。止むを得ずして之を用ふと云ふは、止むを得ずして盗業を爲すと言ふに同じ」<sup>45</sup>、と語る先人がいたことを日本人は誇りに思うべきです。

昌益、墨子の「非攻」の非戦論こそ、見直すべき人類の指針です。良心者は、自分の国に対する反逆者でもなければ売国奴でもありません。為政者の政治形態を転覆し、奪取して、新たな政権をつくる目的を持ち合わせているのでもありません。「世間虚仮」を説いた聖徳太子は世俗の営みを批判しておきながら、政治の中枢に立ちました。非戦のための戦いかは、体制に対してノンと

<sup>42</sup> 「良心者」は良心的兵役拒否者の略。岩村義雄の造語。良心者 『毎日新聞』(2015年4月8日付)。「9条世界普及へ良心者は叫び続ける」。

<sup>43</sup> 『墨子』(和田武司訳 徳間書店 1973年 91頁)。墨子は「非攻主義」により、戦争が本質的に殺人行為であることを論証し、戦争こそが最大の不義であることを力説(同書 20頁)。

<sup>44</sup> 『安藤昌益と自然営道』(渡辺大濤 勁草書房 1970年 300頁)。

<sup>45</sup> 同 149頁。

言うアナキストではないと同時に、自分が現体制に取って代わる権力意志を持ち合わせているのでもありません。良心者は政治中枢で清濁併せ呑む器量を持ち合わせてはいないからです。国家権力の全体を否定するのではなく、あくまでも軍事的権力に対する抵抗です。

教皇ヨハネ・パウロ2世[1920-2005]は、2003年3月20日、「過去への反省なしに未来への前進はありえない」と過去千年の間にキリスト教徒が犯した罪の赦しを乞うように訴えました。何世紀も紛争が続いた英国・北アイルランド。武力を背景にした支配のヒエラルキーは連鎖を招くだけです。2013年6月、英国の北アイルランドの隔離されたロックアーンのリゾートホテルで主要8カ国首脳会議(G8サミット)が開催されました。アイルランドにおけるローマ・カトリック信者居住区と英国聖公会信者居住区の間には50箇所以上の壁があります。双方の武装衝突による敵対関係はいまだに取り除かれていません。北アイルランド・ベルファスト東部のプロテスタント地区には含まれたカトリック地区ショートランド付近で2014年6月20日、両勢力の大規模な衝突が発生したりします。分断と憎しみは双方が聖書に立ち帰らない限り取り除かれないでしょう。

領土問題は国の固有の面積の問題だと思いきや違ひをしてはなりません。昔の戦争は敵国に侵入して、降伏を力づくにより奪ったことでしょう。しかし、現在の戦争は相手の国土に攻め入ったとしても、そこに居住する民が占領する国に従わなければ無意味です。軍隊のない国々である無防備のコスタリカ、パラオ共和国、キリバス共和国、バヌアツ共和国、サモア独立国、モルジブ共和国、モーリシャス共和国、アンドラ公国、サンマリノ共和国、モナコ公国、リヒテンシュタイン公国、アイスランド共和国、ドミニカ国、ハイチ共和国、パナマ共和国などに軍事強国は攻め入りません。なぜならコスタリカならば、コスタリカ人が侵入を歓迎しなければ、戦争の意義がないからです。

キング牧師は非暴力によるバス・ボイコット闘争を呼びかけました。その結果、公民権法を成立させ、黒人と白人の間の壁を低くしました。ボイコットは英国土地差配人(land agent)チャールズ・カニンガム・ボイコット[1832-1897]の名前からとられました。英国人ボイコットはアイルランドで小作人たちから一斉に反発されたことに由来しています。北アイルランドも武力侵攻によって、面積を征服しても民が喜ばないなら徒労に帰します。クリミア、ドネツク、ドニエストルにロシア軍が遠征するのは在住の民が支持するからです。尖閣諸島、竹島にしても歴史的に固有の領土と主張し合うなら、かつて7つの海を支配した大英帝国の勢力図で地球上の約五分の一が埋め尽くされてしまうことを想起する冷静さが求められます<sup>46</sup>。歴史的な先住性をテーマにするなら、ロシアも日本も資格がないことに気づかねばなりません。クリル諸島(アイヌ語「私たち民族が住んでいます」の意)は先住民族アイヌに返還すべきだからです。領土問題の解決が長引くのはナショナリズム、主権国家、国境が横たわっていることが原因です。

戦時下で非戦を貫く良心者にとって、ボイコットのように、命惜しさに故郷英国へ逃げ帰るような居場所がありません。「かくすれば、かくなるものと知りながら、やむにやまれぬ」といのちを危険にさらすこととなります。自分だけでなく、家族が地域、会社、学校で白い目で見られます。ボーナス賞与、退職金、失業手当なども剥奪され、家族から自死者が出ることも余儀なくされます。

9・11テロ以降、「平和」は幻想となりました。イスラーム＝テロという思考停止に陥ったのです。「私たちの文明が生き延び、存続してきたのは、過ちを犯すたびにそれを認め、その多くを正してきたからだ」と戦争のために敵愾心を煽ることをやめる叡知が必要です<sup>47</sup>。

したがって、いかなる国においても、良心者は武器を棄てる決意について、公平に構成された

<sup>46</sup> 1922年大英帝国の総面積3330平方キロ、全世界の陸地面積の22.43%。 *Empire, The rise and demise of the British world order and the lessons for global power* Niall Ferguson Basic Books 2004。

<sup>47</sup> “Newsweek” 2011.9.14 Andrew Sullivan アンドルー・サリバン 英国人作家。“We have survived and endured as a civilization because we have recognized our errors and corrected them”。

裁判所(軍法会議)で、自分の平和理念を語れるように認められる社会を作るように働きかけようとしてします。審理経過は秘密保護法案のように政府首脳、首長、警察官僚だけが知っているのではなく、公開されることを願います。どんな思想、イデオロギー、体制の国であっても、良心者に死刑を科することがあってはならないでしょう。良心者は軍事教練、軍隊で要求される義務を免除されるような法律ができることを訴えます。時には非戦闘作業に従事できる条件付きの証明書を国籍、LGBTQ<sup>48</sup>、学歴に関係なく適用されるような国際的な協定ができればと願います。

### c. 民主主義に代わる価値観

ヘブライ語の平和は、シャローム **שָׁלוֹם** *shalom* です。原意は「完成、全体」であり、動詞のシャレム **שָׁלַם** *shalem* に由来します。シャレムはカル態なら、「完了する、欠陥が伴わない」、ピエル態で「完成する、安全にする、完璧に元通りにする」の意をもちます<sup>49</sup>。

「非戦争」は平和とイコールではありません。「非平和」(*peacelessness* ピースレス)という状態があるならば、平和ではあり得ない、とガンディ研究所長のスガタ・ダスグプタ<sup>50</sup>は 1968 年の第 2 回国際平和研究学会で語りました。非戦争であっても、民が呻いているなら「平和」とは言えません。

民主主義を凌駕する価値観は、三つあります。一つは、非戦です。二つ目は、寄り添う「無」宗教です。三つ目は、「耕支縁」です。戦争から非戦へ移行するために国境をなくします。ピラミッド型の宗教ヒエラルキーから「無」宗教<sup>51</sup>のスピリチュアリティで民族、言語、膚の色に関係のない共生をめざすべきです。都会のわずかな空き地であっても自作自農による自然の恵みを味わう回帰が必要です。貪欲とは無縁です。50 年計画です。最初の 7 年は、外交の深化、祈りの交流、ベーシックインカム<sup>52</sup>に相当する保障を考慮します。「あなたがたが土地の実りの刈り入れをするとき、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。刈り入れの落ち穂を拾い集めてはならない。貧しい人や寄留者のために残しなさい」(レビ記 23:22)。次の 7 年に日米安保に依拠する現在の政策を放棄します。ダム撤廃、河川工法を自然優先、無農薬、有機による農法を通じて「田・山・湾の復活」を推進します。さらに 7 年、コンクリートではない、木造の高層住宅です。原発、宇宙衛星、リニアを撤廃し、枯渇資源に依存しない再生可能エネルギーを推進します。次の 7 年には、重債務貧困国(債務が GNP の 80%を越えている国)のグローバルノースの先進国は債務削減します。すると餓死しているアフリカなど貧しい地域の子どもたちは救われます<sup>53</sup>。「天引きしたり、利益を得たりしてはならない。……あなたのもとでその同胞が暮らすことができるようにしなさい」(レビ記 25:36)。

<sup>48</sup> LGBTQ のセクシュアル・マイノリティー(少数者)に無知、無関心、消極的であったことを話し合いにより共生する。

<sup>49</sup> *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* Francis Brown, S.R.Driver and C.A.Briggs Oxford University 1907 p.1022 ; 『平和のコンセプト』(ジョン・マッコリー 東方敬信訳 新教出版社 2008 年 35 頁)。

<sup>50</sup> “Peacelessness and Mal-development; A new theme for peace research in developing nations.” in *International Peace Research Association Second International Conference, ASSE, Van Gorcum, 1968, Vol II, p.20-21.*

<sup>51</sup> 拙論 WCRP 「平和大学講座」基調発題 世界宗教者平和会議 2022 年 3 月 10 日。「無」宗教とは無宗教ではなく、キリストがご自分を「無」に地上に来られただけでなく(フィリピ 2:7)、「無」に等しい(I コリント 1:28)オクロス(ギリシャ語 **ὄχλος** オクロス *ochlos* (民)= **עַם הָאָרֶץ** (ヘブライ語 *am ha-ha'ares* <地の民、土の人の意>)で新しい共同体をつくられたことから、「無」宗教の原点と岩村義雄は発題した。

<sup>52</sup> ベーシックインカム(Basic Income 以後、BI)とは、最低限暮らしに必要な現金を、無条件ですべての国民に死ぬまで定期的に支給する政策である。アイルランド政府は「ベーシックインカム」を実験していることを報道。最低所得保障はアーティストの生活をどのように変えたかを、イアン・フェイさん(32 歳)に問うている “*The New York Times*” March 31, 2023。

<sup>53</sup> 社会学者 A.ギデンズが言うグローバリゼーション(国境を越えた経済的、政治的、文化的、社会的な結びつきが、それぞれの国のなかで暮らしている人々の運命を決定的に条件づけている)『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』(佐和隆光訳 ダイアモンド社 2001 年)と構造的暴力である開発主義に抗う環境正義である。『ラディカル・デモクラシー—可能性の政治学』(C.ダグラス・ラミス 加地永都子訳 岩波書店 1998 年 頁)。

7年×7回=49年の翌年50年目(ヨベル<sup>54</sup>の年)には、イヴァン・イリッチ<sup>55</sup>が現代社会を鋭く批判している諸悪の根源から脱皮します。その時、脱学校化、脱病院化、脱政治化が実現しているでしょう。環境正義 environmental justice が行き届きます。もはや暴力、犯罪、差別がなくなり、抑圧する権力、権威から解放されます。土地や建物の所有権をもとの持ち主に戻します。雇い人や奴隷をもとの出身地に戻します。ヨベルは解放の年です。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマは呻きの中から解放を発信します。

人類がなし得なかった新しいコミュニティの幕開けです。

### <結論>

非戦を唱えることは臆病者という烙印が押されます。臆病とそしられても、武具を棄てるには勇気がいらぬ。「体は殺しても、命は殺すことのできない子どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイ 10:28)の決断があれば、挫折しないでしょう。富、名声、権力を得るために生きる生き方とは相容れません。非戦のために中断することを「犬死」と人は蔑むでしょう。鼻で息する人間の評価によって、魂を売り飛ばすわけにはいきません。

民主主義を標ぼうする大国がロシア—ウクライナ戦争に軍事支援しています。中東でも2011年、「アラブの春」という民主化運動を後押ししたことにより、内戦に陥りました。シリア、リビア、イエメンは、国民の多くが飢餓に苦しみ、人道危機に陥っています。「民主化」がテロの発生する温床となったことはいなめません。現在、日本が誇る憲法9条の価値が色あせようと、憲法改正へとうねりが起きています。オスロのノーベル平和賞委員会に今年1月31日に次のように発信しました。

アジアの近隣諸国に甚大な被害を及ぼした戦争の歴史を歪曲し、近隣諸国との友好の絆を危うくする動きが起こっています。このような近隣諸国との摩擦をことさらに強調する勢力が中心となって、戦争によって国際紛争解決の手段とするために9条を曲解しようとしています。日本国憲法は、9条1項で「戦争(war)」を放棄し、9条2項で「戦争潜在力(war potential)」の不保持を誓いました。しかし、日本の現首相も、「自衛隊は軍隊であり合憲である」と言います。岸田文雄内閣は安保関連3文書(国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力整備計画)を2022年12月16日、閣議決定しました。「専守防衛」のこれまでの方針を投げ捨て、「敵基地攻撃能力」の保有を宣言しました。軍事費に今後5年間で43兆円を投じます。今こそ、防衛費増額の時ではなく、唯一の戦争被爆国である日本は徹底した平和的外交を展開すべきです。ロシア—ウクライナ戦争の恐怖について東アジアのどの民も軍事力の行使は望んでいません。戦争する国への歯止めになる憲法9条があつてこそ、周辺諸国に脅威を与えることなく平和外交を推進できます。憲法9条は、「台湾有事」の際、軍拡思想を退け、参戦を断念させ、国内で非戦の輪を拡げる基軸になります。憲法9条保持は戦争の悲惨さを体験した人々の強い思いでした。そして、この思いは今日もなお多くの日本国民の思いでありつづけています。この憲法の誕生以来、一度も憲法を変えることなく、多くの人たちがこの憲法9条の精神を守り生かすために、ベトナム戦争反対など、多くの人たちがさまざまな運動、取組をしてきた歴史が私たちにはあります。憲法9条は日本の軍事

<sup>54</sup> 「ヨベル」(ヘブライ語 יובל <「雄羊の角笛」の意> yowbel ラテン語 Annus sanctus アニウス・サンクトゥス, Jubilacum ジュビレウム, 英語 Jubilee ジュビリー)。50年「ジュビリー・イヤー」に角笛を鳴らして全住民に解放の宣言をする。

<sup>55</sup> イヴァン・イリッチ[1926-2002] オーストリアのウィーン生まれの文明批評家。現代産業社会批判。『キリスト教と社会学の間』(村田充八 晃洋書房 2017年 240頁) イリッチは、ウィーン生まれの元カトリックの司祭であり、産業社会のなかで、よき「消費者」として活動せざるをえない状態におかれている人間存在を、『脱学校の社会』(邦訳、1971年)や『脱病院化社会—医療の限界—』(邦訳、1979年のなか)に書き記している。そこでは、学校教育のなかで、学校という組織に従属し管理教育されている生徒たちの存在や、病院のなかで単なる病気を治してもらった患者=消費者でしかない存在に注目し、「自立した存在」としての人間の復興を呼びかけている。

大国化の歯止めになっています。憲法9条の存在は近隣諸国のみならず、国際社会からの信頼を勝ち得てきました。さらに私たちは憲法9条が、世界の戦争、紛争、そして暴力を解決する突破口となることを確信しています。人類の希望としてこれを将来次世代への贈り物として、人類の叡知の結晶である憲法9条が世界の宝として、提唱していくことをここに再び決意し、憲法9条こそ、ノーベル平和賞にふさわしいものとして、世界に訴えます

国体は不朽ですか。国を愛するから武具をとり、戦うと決意していても、国は永遠に続くとは限りません。無条件降伏に再び、追いやられるでしょう。ローマ帝国のような起伏、興隆、滅亡にならない保障はありません。国を愛するが故に戦闘行為につく非人間化に無感覚、鈍感、無化してしまう危険性から覚醒しなければなりません。真に国を愛するなら、いのちを顧みる選択に古今東西、普遍の導線があるでしょう。「汝殺すなかれ」。殺生をしない非戦の誓いは永遠のものです。「己れの生涯はこの一筋の道にかかる」(松尾芭蕉[1644-1694] 奥の細道)の気迫をもちましょう。永遠の証しのために生きるのは臆病者ではなく、勇者だけができる証しです。

説教原稿を翌日、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただきました。また不明瞭な箇所について訂正していただきました事務局の翻訳家徳留由美氏、佐々木美和氏にも感謝します。